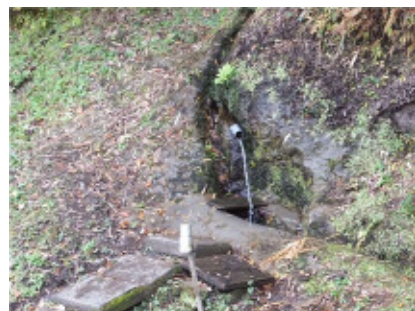


私たちがめざすもの それは・・・

ゆたかな緑 きれいな水 いきた大地

NPO法人水環境研究所

わきみず通信



かくれ水（長南町）

第15号

平成26年7月15日発行

活 動 し ポ ー ト

平成25年度の活動をまとめました

公民館講座の支援

佐倉市内の公民館で開催された講座の企画、講師を担当しました。

① 佐倉市和田公民館「和田地域塾 和田の湧水を訪ねて」(9月25日)

佐倉市和田地区にある谷津田と豊富な湧き水を利用している民家を地元の大川様に案内していただきました。谷津田では、斜面沿いに浸み出してくる湧き水とその湧き水を利用している水田を、また民家では丸井戸や敷地内の崖から湧水を引いて生活に利用している様子を見学しました。湧き水ではバックテストで水質を調べたり、井戸の水位を測って湧き水との関係を説明しました。小雨模様のすっきりしない天候でしたが、参加者の皆さんには印旛沼流域上流部の恵まれた水環境を実感していただけたのではないのでしょうか。



② 佐倉市臼井公民館「臼井の湧水めぐり」(12月15日)



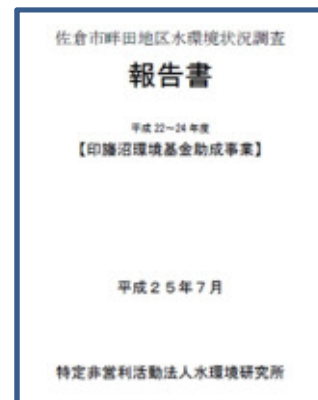
臼井地区近郊に住んでいる方たちにより地元の自然を知ってもらおうと始まったこの企画も、3年目です。今回は、家康公ゆかりの「権現水」や開発による地形の変遷とともに人工的に湧き出ている湧水も見学しました。また、新企画として、身近な材料でできるpH測定の実験を行いました。参加者の皆さんは、昔の理科の実験さながら、和気あいあいとした雰囲気の中、楽しい時間を過ごしました。これで、水への関心がより深まってくれたことでしょう。

③ 佐倉市中央公民館「佐倉学セミナー 印旛沼の自然」

今回のセミナーは、これまでの水環境保全に関連したテーマと趣きを変え、水による災害をテーマに選びました。た。印旛沼と水害の話では、白鳥会員が印旛沼の成因や「外水」と「内水」による水害の話、岩井会員は印旛沼流域の地形と水害の話をしました。受講者の皆さんは、生活の安全に係る身近な題材だけに、真剣に耳を傾けていたのが印象的でした。

畔田沢水環境調査（印旛沼環境基金助成事業）

畔田沢の調査は4年目を迎え、畔田沢の谷津環境とその特徴が見えてきました。また、平成25年度は過去3年間の成果を冊子にとりまとめ、佐倉市をはじめ、公民館や佐倉の環境保全活動に関わっている皆さんに配布しました。畔田沢の魅力はなんとといっても、谷津の原風景と佐倉市でもトップクラスを誇る良好な水質でしょう。4年間の調査を通し、本流を流れる水の酸化還元電位が年間を通して低い傾向にあることがわかりました。このことが、果たして畔田沢の良好な水質と関連性があるのか、他の谷津と比較してその謎を明らかにしていきたいと考えています。今、畔田谷津は涵養域ばかりでなく流出域である谷部も開発の波に押されて徐々に姿を変えつつあります。私たちは今後も引き続きモニタリングを実施し見守って行きたいと考えています。



湧水モニタリング調査

「ちばの湧水めぐり」が発行されてから続けているモニタリング調査も平成25年度で3年目となりました。前年度の巡検で訪れた地点も新規に加え、平成25年度は66地点の湧水を調査しました。さらに、これまでの調査項目（水温、pH、電気伝導率など）に加え、パックテストによる硝酸性窒素濃度も測りました。湧水百選の調査からはや8年が経過し、環境の変化と共に湧水も変わってきています。環境を映す湧水の姿をこれからも追跡して行きます。



姿を変えつつある大藪池の湧水
(左：8年前 右：現在)

お知らせ

(1) 新理事長に瀧和夫会員、副理事長に中村正直会員が就任しました。

第11回総会において役員交代が承認され、新しく瀧理事長、中村副理事長が就任しました。これまで理事長を務めてこられました今橋正征会員には長い間大変お疲れ様でした。当法人を軌道に乗せて無難に活動を続けてこられたのもひとえに旧今橋理事長の大きな支えがあったこそだと思います。新しく就任された瀧理事長、及び中村副理事長には当法人のさらなる発展に力を発揮していただけるものと期待されます。

(2) 公開学習会「みんなで学ぶ印旛沼セミナー 空からみた印旛沼」を開催します。

今回は、外部講師として近藤昭彦氏(千葉大学)をお招きし、リモートセンシングを駆使して印旛沼の昔から現在、そして未来の新しい姿をお話していただきます。

平成26年12月13日(土) 午後1:30~4:00 (1:00開場) 入場無料

会場：ミレニアムセンター佐倉 ホール 皆様 ぜひご参加ください。

(3) 湧水モニタリング調査について

今年度も昨年度に引き続き、9月から各エリア別に湧水調査が始まります。各コースのスケジュールは随時メール、ホームページを通して皆様にお知らせいたします。ふるってご参加ください。

(4) 年報第3号を発行します。

年報第3号の発行に向けて、現在取りまとめ中です。発行予定は平成26年10月の予定です。

(5) 印旛沼環境基金の助成事業を申請しました。

これまで4年間に渡って調査研究してきた畔田沢の水環境調査の成果をもとに、谷津田における脱窒効果の検証を目的とした調査をテーマとして申請しました。皆様のご協力をお願いいたします。

理事長就任にあたって

瀧 和夫

印旛沼流域の湧水とそれに係る地質や生物環境などを調査研究の対象とする会として、平成 16 年 10 月に NPO 法人水環境研究所が発足しました。初代理事長に白鳥孝治理事、次いで、第 2 代理事長の今橋正征理事へバトンが渡され、本年 5 月 18 日の理事会にて私、瀧和夫がその任を引き継ぐこととなりました。当会発足から 10 年の節目に大任をお引き受けすることは「身が引き締まる」の一言に尽きる思いでございます。会員の皆様をはじめ、会の目的に共鳴される多くの方々のご指導・ご鞭撻を得て、今までの事業方針を基本として進めてまいりたく考えているところでございます。

本研究所は 20 余名の会員構成であります。機関誌としての「わきみず通信」、「特定非営利法人水環境研究所年報」、財団法人印旛沼環境基金の助成事業による「佐倉市畔田地区水環境状況調査報告書」、さらには、千葉県全域調査の成果としての「ちばの湧水めぐり」を出版するまでに成長する事が出来ました。他にも諸活動として、「講演会」、「環境講座」、「湧水定点調査」、「印旛沼水環境保全調査研究」、「巡検」等々、地域の人々との連携・協働の下での活動を進めてきたところでございます。

これらの諸活動・成果を継承しつつ、会の継続的發展に尽力し、印旛沼及び千葉県域の環境保全に向けて皆様と共に一層努力してまいります。多くの方々を本会を通して交流の輪を広げ、より多くの知識と知恵が得られるような NPO 法人水環境研究所となりますことを願ってやみません。会員の皆様のなご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

副理事長就任にあたって

中村 正直

当 NPO 法人発足以来、事務局の一員として会員皆様の活動を微力ながら支えてまいりました。そして、10 年の節目を迎えた記念する年に、瀧理事長の就任にともない副理事長の任を引き継ぐこととなりました。

法人の活動も調査・研究・普及活動と多岐にわたります。その成果も年報や「ちばの湧水めぐり」の出版、財団法人印旛沼環境基金の助成事業による「佐倉市畔田地区水環境状況調査報告書」など、着実に社会に残してまいりました。今後とも事務局の仕事を継続しながら、瀧理事長のもと法人の継続的發展に努力していきたいと考えております。今後とも会員皆様のご協力とご支援を賜りますようお願いいたします。

印旛沼流域湧水定期調査のご案内

毎月印旛沼流域の湧水調査を実施しております。調査に参加をご希望される方は、事前に堀田和弘理事 (E-Mail : dzf01212@nifty.ne.jp) に直接ご連絡のうえ、日程、集合場所、集合時間等をご確認ください。

事務局より会費納入のお願い：平成 25 年度会費未納の方は、お支払いをお願いいたします。

お支払方法：銀行振り込み（振込先 千葉銀行 本店営業部（普通）3706977
又は事務局へ直接（080-6515-6497）

本法人は皆様の会費により運営されており、活動に伴う消耗品や活動参加者への交通費、日当等に充てられています。どうぞ会員の皆様方には、ご理解とご協力のほどお願いいたします。

「わきみず通信」第 15 号

発行 平成 26 年 7 月 15 日

編集・著作 特定非営利活動法人水環境研究所

URL : <http://www.wakimizu.org/>

お問い合わせは下記まで

e-mail: office_iwe@wakimizu.org

*****編集後記*****

久々に「わきみず通信」をお届けすることができました。遅くなったことを編集者としてお詫び申し上げます。早いもので、水環境研究所は今年の 10 月で 10 周年を迎えます。10 年前、熱い思いを持って NPO の立上げに力を注いでくれた日暮淳氏の姿が思い出されます。NPO の誕生を待たずに彼は天国に逝ってしまいましたが、これからも彼の思いを未来につないでいきたいと思っております。

印旛郡誌に見る湧水と人々（2）

勝間田の池



勝間田の池は、印旛郡誌に2ページにわたって紹介されています。余程有名な池であったことでしょう。またこの池は、万葉集にみられるとして有名です。その概要は次の通りです。

勝間田の池は旧和田村（現佐倉市）下勝田にあります。西行法師は、こんなところに池のあるのを不思議に思っ、平安の都から箱根路を越えて武蔵野の東にある総の原の勝田村まではるばるとやってきました。そこは、老樹が生い茂り狐の鳴くうら寂しいところで、弁財天の琵琶の調べか松風の聞こえるようなところでした。

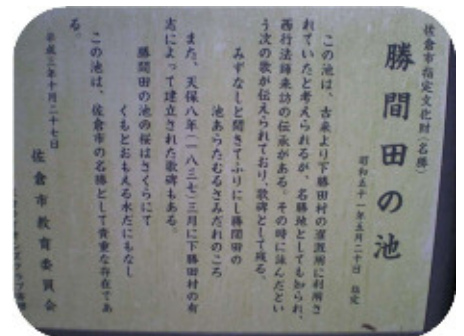
法師は昼どきの鐘の音を聞き、ここで昼食をとろうとして、近くの農夫に「拙僧に箸を一膳貸して下され」と頼みました。農夫は、「こんな辺鄙なところで貸す箸はない」といって、池の葦（アシ）を折って箸にしました。西行法師は、葦の箸で昼食をとり、楽しく食事をしたお礼にと、一首を詠みました。

水なしと聞いてふりにし勝間田の池 池あらたまるさみだれのころ

法師は、箸に使った葦をその場にさして、弁財天よ懐かしの池よさらば、と立ち去りました。葦の箸は根を下ろして「二股の葦」となり、池の中に広がって茂りました。法師は、「この池には、わが挿した二股の葦以外の葦は生えてはならぬ。」といったので、それから二股の葦だけが生えるようになった、ということです。

勝間田の池は、勝田川の支流に当たる枝谷津の谷頭にあり、水田の灌漑用水に使われていました。このような話を添えて、池を大切にしていたことが分かります。現在は、佐倉市の名所としてよく整備保存され昔をしのばせる静かな弁天池となっています。濃緑の谷津の斜面林に包まれた弁天様の池は、寂の心を漂わせた深山のたたずまいのなかで、池の底から水の湧き出す微かなさざ波が見られます。

なお、万葉集の勝間田の池は、千葉県葛飾郡（現船橋市）にある池という説もあります。こちらの池は、すでに消滅状態になっています。



（白鳥孝治）